My CUL
Chuo University Library

20
November 2012
Autumn

特集

【座談会】
故・嶺 卓二先生を振り返る

ケルムスコット・プレス版『チョーサー著作集』（ダヴス製本所版）より
標題紙と口絵

CONTENTS

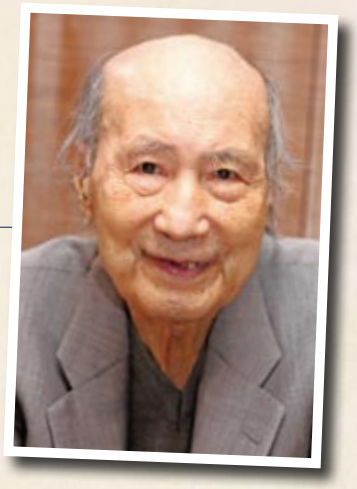
■特集　【座談会】故・嶺 卓二先生を振り返る
■新収資料紹介　中央大学教職員著作目録・資料目録（2012.2 ～ 2012.5 収集分）

中央大学図書館

特集

【座談会】

故・嶺 卓二先生を振り返る



【出席者】

図書館長　見市　雅俊（文学部教授）
青木　和夫（文学部教授）
里麻　静夫（法学部教授）
秋山　嘉（法学部教授）
三好　みゆき（法学部教授）

この度、中央大学図書館は、故嶺卓二先生（東京大学名誉教授）より、本学の英語・英文学研究の充実・発展に活用していただきたいとのお申し出を受け、高額の寄付金を頂戴しました。このご寄付により、研究者、学部学生も含めて、非常に利用価値の高いオンライン・データベースである ECCO(Eighteenth Century Collections Online)、Literature Online (LION)、British Periodicals Collection 1+2 などの導入が実現いたしました。また、稀覯書関連では、本学が 1987 年度より収集を開始し、全 53 タイトルのうち 45 タイトルを所蔵していた英国の工芸家・詩人・社会思想家であるウィリアム・モリスが創設した私家版印刷所ケルムスコット・プレス刊本のさらなる充実と関連コレクションの収集を図ることができました。とりわけ、ケルムスコット・プレス刊本の中でも最高傑作とされ「世界三大美書」の一つとも評される『チョーサー著作集』（ダヴス製本所版）といった、本学の宝ともなりうる資料を収集できた点は特筆すべきことと言えます。貴重なご寄付をいただきましたことを、ここに厚く御礼申し上げたいと思います。

そこで今号では、特集として、今回のご寄付をいただくご縁が生まれるに至った原点となる、嶺先生のもとでの「読書会」の模様や嶺先生のお人柄などについて回想したいという趣旨で、座談会を催しました。当時の読書会のメンバーであった本学の先生方にお集まりいただき、見市図書館長の司会のもと、大いに語っていただきました。

先生のもとで英語精読に励みたい
―教え子たちの想いから始まった読書会

見市図書館長（以下館長）：嶺先生と皆さん方との関わりは、嶺先生がご自宅で開かれていた読書会を中心に深められていったと伺っています。この読書会は、いつ頃、どのような経緯で始められたものなのでしょうか。

青木教授（以下敬称略）：もともと嶺先生は、東京大学の教養学部と英文科大学院で授業を担当されていました。私は大学院に進んでから嶺先生の授業を受けたのですが、授業スタイルは、とにかくテキストの一語一語をゆるがせにせず、丁寧に読んでいく、というもの。日本語訳もなく、通常であれば読みにくいようなテキストを語学的に綿密に読み進めることで、英語力が着実に身についていくことが感じられる授業でした。レポートの添削も丁寧で、誤りの指摘を細かに書き込んでくださる方でしたね。1975 年、私が嶺先生の授業を受けて 2、3 年ごろのことでしたが、先生が東京大学を定年退官されることになりました。しかし、その後も嶺先生のもとで英語のテキストを精読したい、と希望する者が多かったため、そうした院生や、大学院を出て教員になった者、6 名ほどを参加者として、嶺先生のご自宅で読書会を行うことになったんです。

館長：そうしますと、読書会は今から 37 年も前に始められたんですね。皆さんは、いつ頃から読書会に参加されていたんですか？

青木：私は発足当初から参加させていただきました。

里麻教授（以下敬称略）：私は 1980 年ごろです。読書会に参加していた先輩が、地方の大学に就職が決まったために会を抜けることになり、代わりにどうかと誘っていただきました。

秋山教授（以下敬称略）：私は里麻さんの 2 ～ 3 年後に参加しました。里麻さんに誘っていただいたことがきっかけです。

三好教授（以下敬称略）：私は 1991 年から参加させていただきました。私は出身が東京大学ではありませんので嶺先生との直接の関わりはなかったのですが、当時非常勤講師として勤めていた大学の先生が読書会のメンバーで、声をかけていただきました。そのころ私は教員になって 2 ～ 3 年目の駆け出しで、学生・院生時代にお世話になった富山太佳夫先生にご相談したところ、「嶺先生はとても英語に精通した方だからしっかり鍛えていただきなさい」と勧めていただいて参加した次第です。

近代英語からラテン語、ギリシャ語まで。
幅広く深い知識で、参加者の力を高める

館長：読書会はどれぐらいのスパンで、毎回何時間くらい行われていたんですか？

三好：隔週の日曜日でしたが、参加者の校務等の都合によって少し間隔があくこともありました。嶺先生はこの日曜日の読書会のほかに、83 年に始まった土曜日のジュニアの会も指導されていました。土曜日の会は小津次郎先生の勧めにより、シェイクスピアを専攻する若い方々が集まって始まった、と伺っています。日曜日の会は午後 2 時くらいに始まり、1 時間のティータイムをはさんで 6 ～ 7 時まで行っていました。4 ～ 6 名が出席していました。

館長：「テキストをきちんと読む」ことが嶺先生の授業スタイルだったと青木先生がおっしゃっていましたが、読書会はどのように行われていたのですか？

青木：基本的に、特定のテキストを参加者が順番で翻訳して説明する、輪読形式で進められました。その日の担当者が原文を読んでそれを日本語訳し、文章について説明をします。そして嶺先生が、担当者が十分に理解できていない部分について解説を加える、そうしたやり方で毎回行われていました。最初に取り上げたのが Thomas Browne の *Religio Medici*。題名はラテン語ですが、日本語訳すると『医者の宗教』です。これは、当時日本語訳がなく、原文でしか読むことができない作品でした。しかも、使用したテキストにも最低限の注しかなくて、読みこなすためには *Oxford English Dictionary*（OED、『オックスフォード英語辞典』）を引いて単語の意味などを丹念に調べる必要がありました。それから、Robert Burton の *The Anatomy of Melancholy*（『憂鬱の解剖』）なども読みました。Burton は非常に博識な人で、作品中にラテン語の引用文もたくさん出てくるのですが、嶺先生はラテン語も習得されていたので、そうした箇所についてもお教えいただけました。

館長：まさに「授業」という雰囲気だったんですね。17 世紀の知識人であった Browne や Burton にとって、ラテン語ができることは当たり前ですよね。その著書にはラテン語も用いられているし、そもそも英語の文章自体が難しい。けれど嶺先生はそれを読みこなす力をお持ちだったんですね。

青木：嶺先生はラテン語やギリシャ語の本もたくさんお持ちになっていて、しかもその内容をよく覚えていらっしゃる。引用文についても、これはどの作家のどの作品と、ちゃんと記憶されていて説明してくださいました。

館長：取り上げる作品は嶺先生が決められていたのですか？

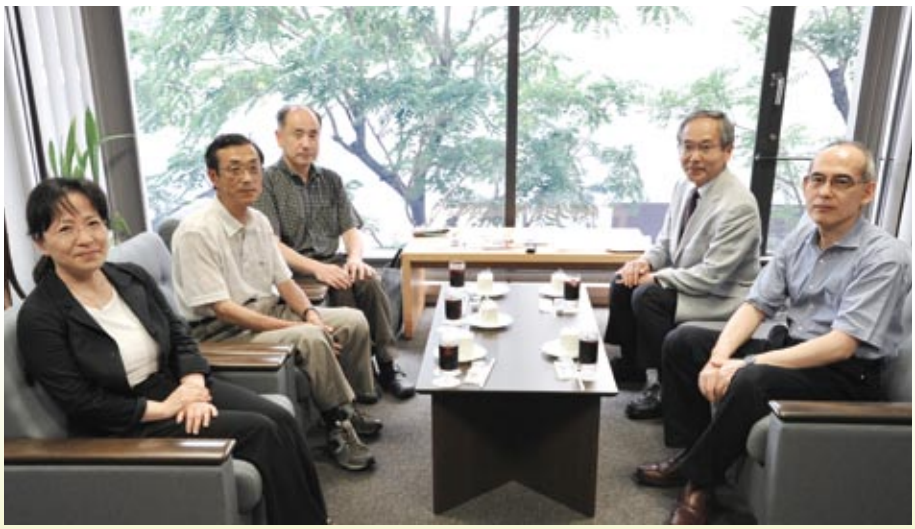
秋山：「次は何を読みますか？」と私たちに希望をお聞きになって、いくつか挙げられた作品の中で、「これがいいだろう」と先生がお決めになっていました。

青木：読書会で読む本は、16 ～ 17 世紀後半くらいの、翻訳がなくて通常では読みにくいようなテキストが多かったです。その理由に、この時代の英語が難解ということがあったと思います。近代英語は 1500 年ごろから始まったとされますが、シェイクスピアが活躍する 1600 年ごろを含む時期に単語が非常に増えてくるんです。新しい英単語がたくさんつくられた。そして、多彩なレトリックを駆使するシェイクスピアなどによって、英語の表現力が発達し、複雑さが増していった。この時期の英語は構文もスッキリしていないことが多いんです。そこで、英語に精通している嶺先生のもとで正確に読む必要があったわけです。

館長：とはいえ、参加者は皆、院生や教員ですから、英語は当然かなり読めるわけですよね。さらに予習もしてくる。それに対して、嶺先生はどんなことを教えてくださるんですか？

三好：私たちが訳したものを嶺先生が訳し直してくださるのですが、語義や語句の語学的・文学的背景などをさらりと補ってくださって。はったりもなく淡々と読み解いてゆかれるのですけれど、それをお聞きしていると、自分の読みの浅さをしみじみと認識させられる、そんな感じでした。しっかり調べたつもりでも、まだまだ奥があるんだと。（笑）

里麻：確かに私も、参加して数年で教員になりましたが、嶺先生との力量の差は教師と学生に近いものがあったと思っています。例えば Thomas Elyot の *The Boke Named the Governour* を取り上げていた時のことですが、この中の“For who commendeth those gardiners that … do attende at no tyme for the takynge and destroyinge of molles … ?”という一節に“attende … for”の表現が出てきます。これは現代英語なら“attend to”を用いるし、当時でも to を使う形は存在したのですけれども、for を使っているのは concerning の意味を出すためではないかと解説してくださったことがありました。なぜその語や言い回しを使っているの



座談会で嶺先生の思い出を語り合われた先生方。
左列手前から、三好みゆき先生、青木和夫先生、秋山嘉先生。右列手前から、里麻靜夫先生、見市雅俊図書館長。

1990 年代に嶺先生ご夫妻を囲んで行われた食事会。
前列左から 3 番目が嶺卓二先生。中央大学教員は、中列右端が三好みゆき先生。後列左から秋山嘉先生、三枝幸雄先生、青木和夫先生。同じく後列右端が里麻静夫先生、その隣が山本恭子先生。

かという根拠を嶺先生にきめ細かに教えていただいたことで、自分の中に英語読解の基盤を築くことができたのではないかと思っています。英語研究に携わる者として、英語を正確に読み込むための「てにをは」を手取り足取り教えていただいた、そういった印象を抱いています。

自身の名を広めることよりも、英語・英文学研究の進展に心血を注ぐ

館長： 英語に関する新旧の知識はもちろん、ラテン語やギリシャ語についても習得していらした。嶺先生は広く、深い学識を持った方だったのですね。

里麻： ラテン語やギリシャ語の主要な古典作品はほぼ完ぺきに読みこなしていて、しかも驚異的な記憶力でそれらを頭の中に保存していた。聖書もほとんど覚えていたと思います。英語についても主要作品はもちろん OED まで読み込んでいて、英語史から修辞的なことまで幅広く理解していた。中世英語から現代英語までの全体像もかなりつかんでいらしたのではないでしょうか。これは通常の人にはまず不可能なことです。読書会で作品を読んでいる時に、「この当時は普通、このような言い方はしなかった」ということをちらりとおっしゃる時がありまして、怖ろしさを感じたことがありました。これは当時の一般的な言い方を理解している、つまり、英語を総体的に把握していらっしゃるということですから。

青木： 本当に高い記憶力をお持ちで、一度読んだら大体頭の中に入る方だったようです。私は嶺先生に「単語の意味や用例をよくご存知ですが、どんなカードを使ってどのように整理しているのかお教えください」とお尋ねしたことがあるんです。すると、「カードをつくるのが面倒なので頭の中に入れておくことにしている」とお答えになって。唖然としてしまいました。(笑)

秋山： 読書会で作品を読んでいて、特に嶺先生のご専門のものでない場合にも、この語は前にも出てきたはずだとおっしゃって、ぱらぱらと探して見つけられるんですよ。ひと月もふた月も前に読んでいた箇所を克明に覚えていらっしゃる。こちらにしてみると驚きで。

青木： この語はどの作者のどの作品にあるはずだとおっしゃって、書斎に行って数分ぐらいで本を持ってこられて、ここですよと教えてくださることが、よくありました。

三好： 嶺先生の記憶力は常人のものではなかったですね。私などのような凡人がどんなに努力しても到達できない境地なのだとひしひしと感じました。

秋山： 嶺先生のご先祖には嶺春泰という、江戸時代後期の医学者がいらっしゃいます。この方は高崎藩の藩医だったのですが、蘭学を学んで杉田玄白や前野良沢とともに『解体新書』の翻訳に尽力したそうです。嶺先生の並外れた記憶力がそうした血筋からきているものだとしたら、我々は諦めるしかないですね。(笑)

館長： 聞けば聞くほどすごいエピソードの持ち主なんですね。しかしその一方で、それだけ突出した力をお持ちになっているのに、執筆された論文の数はそれほど多くはない。私はその点が不思議なのですが。

青木： 私は嶺先生のお仕事の中でも、『詳注シェイクスピア双書』(全 20 巻、研究社) が特に功績の大きなものだと考えています。これは、嶺先生の師にあたる市河三喜先生がつくった注釈本の増補版が出る時に嶺先生が注を補ったもので、シェイクスピア研究に携わる者の多くが活用しています。私自身は学生時代にこの注釈本でシェイクスピアを読み始めたのですが、「詳注」の名の通り、注が非常に詳しく書かれているんです。このシリーズが出版された 1960 ～ 70 年代には他にも多くの注釈本がありましたが、イギリスやアメリカで出されたものは語学的な注は不十分な場合が多かったですね。ところが、嶺先生のこのシリーズは、構文の説明も含めて語学的な注が非常に充実している。シェイクスピアを理解するためには原文をしっかり読みこなさなければならないので、これがあるととても助かるんです。私は今でもこのシリーズを愛用しています。

里麻： この注釈本は、論文何本分にも相当しますよね。

青木： ちょっとした論文より、これだけの注を書く方が何倍もの労力と時間を必要とするんですよ。そして、こういうきちんとした注釈本は論文よりも有益です。信頼できる注のついたテキストは、多くの研究者や学生に長く利用されます。

三好： 1964 年に刊行された *The Kenkyusha Dictionary of Current English Idioms* (研究社) というイディオムの辞典がありまして、市河三喜先生を筆頭に、嶺先生も編者の一人です。これは現代の作品から用例を集め、説明も含めて全編英文でつくられています。この辞書の海外における評価や嶺先生の貢献については、嶺先生とともに編集に参加された木原研三先生のエッセイの中で述べられています。つまり、論文という形式で自分の知識を世に送り出すので

はなく、ご自分をあまり表に出さず、日本における英語・英文学研究を次の世代に引き継ぐという仕事に嶺先生は尽力された、後学の徒のために心血を注がれたということなのではないかと思います。

館長： 名を残したいとか、そうした気持ちを超越された方だったのでしょうか。

青木： ご自身の名をもっと広めようと思われればできたのでしょうけれど、嶺先生はあまり目立つことがお好きではなかったですから。非常に謙虚で控えめな方でした。

三好： 私たちに対しても温和に、隔てなくふるまわれる方でしたね。懇切丁寧なご指導へのせめてものお礼のしるしに、一同からお中元とお歳暮をお贈りしていたのですが、そのたびにこちらが恐縮するほど丁寧な手書きのお礼状をくださいました。

里麻： しかし、学問の面では厳しい側面をお持ちでした。読書会は先生がお亡くなりになる直前の 2010 年 12 月まで行われたのですが、最後に取り上げたのが 14 世紀詩人の Geoffrey Chaucer でした。けれど、現在手に入るテキストの中に 14 世紀の英語を反映した良いものがないと、その点をかなり厳しく指摘されていました。

嶺先生のご自宅にて。

秋山： 現在は Chaucer の作品を写した写本しか入手できないのですが、写し自体が作品発表時よりかなり時代が下ってから行われたもののため、複数の写本を比較検討してもオリジナルを復元することができない。現在のテキストとオリジナルとの間にどれだけのズレがあるか、その点を意識して読まなければいけないと、そうしたことを強調していらっしゃいました。こんなこともあります。16、17 世紀の英語作品の作者が、ラテン語の古典作品を記憶のみに頼って、少し間違った引用をしている。現代も含め、後代の優れた英米の研究者・学者たちが、注釈をする際にその「間違い」に引きずられて、出典箇所について誤った推定ないし無視をしている。嶺先生が正しい出典を指摘されて、参照してみると確かに先生のおっしゃる通りで、それによってその箇所の趣旨もよく腑に落ちる、ということが一度ならずありました。これは真にスリリングな体験でした。

館長： 嶺先生は、留学をされた経験はおありなんですか？

秋山： イギリスに行かれたことは一度もなかったようです。

里麻： けれど鉄道が大好きで、イギリスの地図も読み込んでいらしたようですね。行ったことはないけれど、イギリスの地理についてはよくご存知でした。

秋山： 鉄道に乗ったらこの辺で山が見えてくるはずだとか、頭の中でイギリスの風景が「見えて」いらしたようですね。

館長： 退官されてから、イギリスへ行ってみようと思われなかったのでしょうか。

青木： 散策はお好きでしたから旅行もなさりたかったのでしょうが、嶺先生は体があまりご丈夫ではなかったので。

三好： お若いころ胸を患われたそうで、体を気遣いながら過ごされていました。書物から得たイギリスの知識を、在外研究から戻った私たちに確認するのを楽しんでおられました。

「読書会は自分にとって生きる支え」、本学教員との深い交流がご寄付につながる

館長： 嶺先生が中央大学に資産を寄付してくださった経緯なのですが、このお話を、皆さんは以前からお聞きになっていらっしゃったのでしょうか。

三好： 最初は、先生がお持ちだった書籍と資産を、読書会の参加者を中心に幅広い方々に活用してほしい、そのためにはどこに寄贈すると良いだろうかと、そういった話から始まったように記憶しています。当初から本学に、というわけではなかったように思います。

里麻： 6、7 年くらい前ですね。たまたま読書会の参加者に、我々を始め三枝幸雄先生や山本恭子先生など中央大学の教員が多かったためでしょうか。その後、本学に寄贈をしたいというお話が、私と秋山先生、三好先生がいるところで嶺先生からありました。ただ、その時は具体的に話が進むということはありませんでしたね。

秋山： 嶺先生は 80 歳を過ぎてもあまりお変わりがなくて、お年を召したという感じもなかったので、せっかくのお申し出ではありましたが、正直に申しまして、そのお話が我々にはピンとこなかったんです。私も一応大学の担当事務方に手続方法など聞きに行ったりはしたのですが、特にこちらから改めて先生にそのお話を切り出すこともしませんでした。そうこうしているうちに先生の奥様がけがをされて、そのまま療養に入られましたので、事情が変わったと考えて、それきりになりました。

里麻： ご遺言を残されたことを、嶺先生はまったくおっしゃいませんでしたね。ですから私たちも、先生がお亡くなりになった後に知らされて、とても驚きました。

館長： 普通なら、ちょっと話をされたりしそうなものだけれど、嶺先生はまったくそういうことをされなかった。謙虚で、実に気風（きっぷ）が良い。（笑）使途を「英語英文学研究」と示してく

ださったことで、本学にとっても受け入れやすく、スムーズに手続きを行わせていただくことができたと思います。それにしても、ご自身の経歴にはあまり縁のない本学に、よく多額の寄付をしてくださったなと。

三好： 心当たりと言いますか、読書会の最後の方では、嶺先生が繰り返し、「この会が自分にとって生きる支えになっている」とおっしゃっていた記憶があります。

里麻： 私たちの方こそ大きなご恩があるのですが、「僕にとっては、この読書会でみんなと一緒に英語を読めること自体がありがたい」と。控えめな性格は最後までそのままでした。

青木： 嶺先生はお子さんがいらっしゃらなかったので、もしかしたら私たちのことを子どものように思ってくださっていた、可愛いと思ってくださっていたのではないかという気がします。

館長： 少人数の会で、皆で一つのテーブルを囲んでテキストに向き合っていたことも、嶺先生と参加者との結びつきを強めたのでしょうね。嶺先生は非常に教養豊かな方で、それをひけらかすことはないのだけれど、ただ知識を自分で持っているだけでは淋しい。やはり、キャッチボールをできる相手が必要で、それが皆さん方だった。自身の知識を皆さんに投げかけて反応が返ってくる、そういうやり取りが楽しかったんでしょうね。1960 年代以降、大学を取り巻く環境も急激に変化しましたが、そんな中でもスタイルを変えずに淡々とテキストを精読する読書会を続けた、それはとてもドラマティックなことだと思います。最後まで参加し続けられたということは、皆さん方も楽しまれていたのですよね。

里麻： 私自身も、まさかこれほどまで続けることになるとは思っていませんでした。（笑）ただ、私や秋山先生は専門が嶺先生のご専門の時代と近いので、直接実になることも多かったんですよ。三好先生はご専門が近現代なので、読書会で学んだことがすぐ役立つということはあまりなかったと思いますから、本当に純粋な気持ちで参加されていたのだと思います。

三好： 私は嶺先生が実に楽しそうにテキストを読んで講釈される姿に長年接することで、「研究論文や講義に即役立つ」のとはまた別の利益があったと言いますか、英語の文学作品を読む楽しさとか、昔のご経験を聞かせていただく楽しみをいただいたと思います。

嶺先生のご自宅にて。嶺卓二先生と奥様。

青木： 私は当初の 10 年ぐらい参加させていただいたのですが、本学に来てから教務が忙しくなり、読書会の方はご無沙汰させていただいておりました。しかし、年に 1 度関係者が集まって食事会が開かれており、そちらの方には顔を出させていただきました。読書会の卒業生である、懐かしい顔ぶれもたくさん参加していましたね。

秋山： 嶺先生はお酒を召しあがらないけれどおしゃべりがお好きで。とても楽しそうに過ごしていらっしゃいました。

館長： 皆さんに慕われていたんですね。

里麻： 館長は西洋史の研究家ですので、文献を正確に読むことを専門的に学んでいらっしゃると思うのですが、私たちは精読のスキルを嶺先生に鍛えていただいた。私はある時期から、嶺先生は恐らく世界でも屈指の学識をお持ちだと思うようになったんです。そのような素晴らしい先生に出会えて、直に教えていただく機会を得たのは願ってもない、とてもラッキーなことだと。

三好： 日本人の英語学者や英文学者は、英米の研究者と比較すると大きなハンディキャップを背負った上で学問をせざるを得ない面があります。けれど嶺先生は、イギリス留学のご経験もなく日本国内であれだけの学識を身につけられ、そして異なる言語・文学伝統との緊張をはらんだ距離ゆえに、かえって英米の学者にわからないものも見えていらっしゃったように思われるのです。私は到底、嶺先生の域には及ばないのですが、それでも、日本の英語教育や英文学研究の伝統の良き部分を、可能な間に少しでも吸収したいという思いで読書会に通い続けていたところもあります。嶺先生がいなくなったら、このように英語を読みこなせる方がいなくなるだろうと。

館長： 私や青木先生の時代には、名物というか、存在そのもので教えてくれる先生がいましたよね。大学の教育環境も変化して今はなかなかそんな先生にお目にかかることはできなくなったけれど、皆さんは良い先生に巡り会ったということですね。

三好： 嶺先生が「英語は飽きないからいいね」とよくおっしゃっていたことが思い出されます。生涯、英語を読むことと教えることが心底好きでいらしたのでしょうね。

「一語一語を大切にする」精神を受け継ぎ、本学英語・英文学研究のさらなる飛躍を目指す

館長： これまでも本学の図書館はイギリス関係の蔵書が豊富でしたが、嶺先生からいただいたご寄付を活用することで、英語学や英文学、イギリス史の分野で資料の充実度が一挙に国内トップクラスのレベルになったと考えています。

青木： 本学の図書館は近代イギリスで出版された厖大な書

籍をマイクロフィルムにしたものなど、従来も貴重な資料を数多く所蔵していましたが、18 世紀に刊行された英国・英語圏刊行物のフルテキストをデータベース化した ECCO（Eighteenth Century Collections Online）や Literature Online（LION）、British Periodicals Collection　1＋2 がこのたび加わったことで、研究者や学生にとってより魅力ある環境が整ったのではないでしょうか。

里麻： 西洋史の研究者である見市先生が図書館長を務めていらっしゃる時期に ECCO を導入できたことも、興味深い巡り合わせでしたね。

館長： 16 ～ 17 世紀のイギリス史を研究している者として、ECCO の存在は知っていました。けれど非常に高価なデータベースなので、購入は到底不可能だと思っていたんです。国内でも、4 つの大学くらいしか所有していませんよね。ですから、こういった形で導入することになるとは想像もしませんでした。

三好： 嶺先生のように高い記憶力がなくても、データベースならば検索して資料を探すことができますよね。十分活用しないと「勉強が足りていないのでは」と先生にお叱りを受けるかもしれません。（笑）以前いただいたお手紙に、「忙しい時でも自分の勉強を怠ってはいけません」とあったことを思い出します。

秋山： 私は、読書会の最後に Chaucer の作品を取り上げられたことに、嶺先生のメッセージを感じています。それまでの読書会とは少し趣が変わって、参加者の輪読ではなく嶺先生が講義される形で読み進められました。中世英語から近代英語へ移り変わる過渡期の中で作家がその変化にどう対応しているか、またその言葉を選ぶ作家の姿勢や息遣いのようなもの、恐らく単語レベルでにじみ出てくるそうしたものを嶺先生は敏感に感じ取り、注釈をつけて伝えようとしてくださった。単語の一つひとつに細心の用心を払ってテキストを読むことの重要性を Chaucer 作品の講義を通じて説かれたのだと、今振り返って考えることがあります。

2008 年 12 月 14 日 に嶺先生を囲んで行われた食事会。

館長： 今日先生方からお話を伺って、嶺先生は本当に英語、そして一語一語の言葉を大切になさっていたことが分かりました。そうした精神を引き継ぐことが、先生のご寄付で購入させていただいた図書やデータベースの活用、ひいては本学の英語・英文学研究のさらなる飛躍につながるのではないかと思います。本日はありがとうございました。　〈了〉

故・嶺卓二先生（東京大学名誉教授）経歴および業績

【経歴】

1914（大正 3）年 11 月 4 日～ 2011（平成 23）年 4 月 1 日（享年 96）

- 東京高校（旧制）から東京大学文科甲類に進む
- 同大学卒業後、東京高校教師
- 同校の一高、浦和高校との統合により、東京大学教官
- 同大学教養学部教授として、教養部（駒場）における 1、2 年生の英語、および文学部（本郷）大学院における英文学の講読授業を担当
- 1975 年に同大学を退官
- 引き続き、鶴見大学教授、さらに帝京大学教授を歴任

- 読書会（日曜）は、1975 年に開始
- 読書会（土曜：小津次郎教授の津田塾大学での教え子が中心）は、1983 年に開始

【専門・専攻】

英語学・英文学

シェイクスピア（1564 ～ 1616 年）をはじめとするエリザベス朝文学を中心とし、それにとどまらない広い範囲にわたる英文学作品における英語の語法・用法の研究をされた

【業績】

1950 年～ 74 年	『詳注シェイクスピア双書』（全 20 巻、市河三喜氏との注釈共著、研究社）*
1964 年	『英語イディオム辞典』（市河三喜氏との共著、研究社）
1974 年	『ソネット集』（研究社小英文叢書）
1976 年	「18 世紀の英語の語法二, 三について（I）」（『鶴見大学紀要』第 13 号）
1977 年	「18 世紀の英語の語法二, 三について（II）」（『鶴見大学紀要』第 14 号）
1980 年	「Shakespeare の言語における動詞化された名詞」（『イギリス・ルネサンス―詩と演劇：小津次郎教授還暦記念論集』［紀伊国屋書店、1980 年］所収）
1980 年	「18 世紀の英語の語法二, 三について（III）」（『鶴見大学紀要』第 17 号）
1981 年	「引用句・諺辞典」（『英語青年』127 号）
1983 年	「シェイクスピアの語彙に於けるラテン系の単語について」（『鶴見大学文学部 20 周年論集』）

* 1921（大正 10）年から「研究社英文学叢書」に収録され刊行された市河三喜氏のシェイクスピア作品の注釈をもとにして、さらに収録作品を加えるとともに、それまでの海外のシェイクスピア研究の成果を参照することによって、注釈の大幅な補訂を行い、「研究社詳注シェイクスピア双書」として刊行したもの

中央大学図書館では、故・嶺卓二先生からの寄付金によって購入いたしました稀覯書の展示を
『第 18 回中央大学図書館企画展示：ウィリアム・モリスと関連の作家たち』と題し、
次の要領で開催いたしますので、この機会に是非ご覧ください。

◆期間：2012 年 11 月 12 日（月）～ 12 月 8 日（土）　◆場所：中央図書館 2 階展示コーナー

新収資料紹介

教職員著作目録　2012.2 – 2012.5 配架図書一覧　（　　）は所属学部等

著者名		書　名	出版社	配架場所	請求記号
リズ・ブルボー 浅岡 夢二 (法)	著 訳	官能とセクシャリティ : 「こころ・からだ・たましい」のレッスン	ハート出版	中央書庫 / 開架	367.6/B67
浅田 統一郎 (経) ほか ケインズ学会	著 編	危機の中で「ケインズ」から学ぶ : 資本主義とヴィジョンの再生を目指して	作品社	中央書庫 / 開架	331.7/Ke67/Ke25
アーダルベルト・シュティフター ほか 新井 裕 (商) 戸口 日出夫 (商) ほか 中央大学人文科学研究所	著 訳 編	ウィーンとウィーン人 (中央大学人文科学研究所翻訳叢書 6)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	382.346/St6
石川 晃弘 (名) 佐々木 正道 (文) ほか	編著	グローバル化のなかの企業文化 : 国際比較調査から (研究叢書 25)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	335.2/I76
石村 広 (文)	著	中国語結果構文の研究 : 動詞連続構造の観点から	白帝社	中央書庫 / 中国言語	825.9/I78
野中 郁次郎 磯村 和人 (会計) ほか	編 著	経営は哲学なり	ナカニシヤ出版	開架 / 田町会計	335.1/N95
大杉 謙一 (法務) ほか	著	事例で考える会社法 (法学教室 Library)	有斐閣	中央書庫 / 開架	325.2/I89
大野 一道 (名)	著	「民衆」の発見 : ミシュレからペギーへ	藤原書店	中央書庫 / 開架	309.0235/O67
加賀野井 秀一 (理)	著	猟奇博物館へようこそ : 西洋近代知の暗部をめぐる旅	白水社	開架 / 理開	133/Ka16
中央大学人文科学研究所 金光 仁三郎 (名) 渡邉 浩司 (経) ほか	編 訳	フランス民話集 = Le conte populaire français　1　(中央大学人文科学研究所翻訳叢書 5)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	388.35/C66
上坪 正徳 (名)	著	キーツのシェイクスピア : 談話会 (人文研ブックレット 28)	中央大学人文科学研究所	中央書庫 / 開架	931/Ke13/Ka38
研究会チーム「多文化社会と教育研究」 国本 伊代 (名) ほか	著 報告	多文化社会における国民形成 : タイの事例と EU の事例 : 公開研究会 (人文研ブックレット 29)	中央大学人文科学研究所	中央書庫 / 開架	361.6/Ke45
齋藤 道彦 (経) 千葉 謙悟 (経) , 李 廷江 (法) 子安 加余子 (経) 佐藤 元英 (文) , 深町 英夫 (経) 土田 哲夫 (経) 谷口 洋志 (経) ほか	編著 執筆	中国への多角的アプローチ (中央大学政策文化総合研究所研究叢書 13)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	302.1/C66
椎橋 隆幸 (法) ほか 只木 誠 (法) , 曲田 統 (法) 小木曽 綾 (法務) ほか	編・執筆 執筆・訳	変動する 21 世紀において共有される刑事法の課題 (中国刑事法の形成と特色 : 日中刑事法学術討論会報告書 第 13 号)	成文堂	中央書庫 開架	326.922/C62 326.922/Sh32
塩見 英治 (経) , 山﨑 朗 (経) 松浦 司 (経) , 飯島 大邦 (経) 谷口 洋志 (経)	編著 執筆	人口減少下の制度改革と地域政策 (中央大学経済研究所研究叢書 55)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	334.31/Sh74
国友 直人 杉山 高一 (理) ほか	著 編	構造方程式モデルと計量経済学 (シリーズ多変量データの統計科学 10)	朝倉書店	中央書庫 理開	417.5/Sh88 417/Ku46
鈴木 俊幸 (文)	著	蔦屋重三郎　新版　(平凡社ライブラリー 756)	平凡社	中央書庫 / 開架	289/Ts92/Su96
高橋 宏志 (法務)	著	重点講義民事訴訟法　上　第 2 版	有斐閣	中央書庫 / 開架	327.2/Ta33
滝田 賢治 (法) 深町 英夫 (経) , 塩見 英治 (経) 高橋 由明 (商) , 星野 智 (法) 齋藤 道彦 (経)	編著 執筆・訳	21 世紀東ユーラシアの地政学 (中央大学学術シンポジウム研究叢書 8)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	312.2/Ta73
竹中 昌宏 (名)	著	カトリックとシェイクスピア : 談話会 (人文研ブックレット 27)	中央大学人文科学研究所	中央書庫 / 開架	772.33/Sh12/Ta64
田中 素香 (経) , 林 光洋 (経) 土屋 六郎 (名) , 岸 真清 (商) 田中 拓男 (名) ほか	編著 執筆	世界経済の新潮流 : グローバリゼーション、地域経済統合、経済格差に注目して (中央大学経済研究所研究叢書 56)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	333.6/Ta84
スティーブン・ローゼンバウム 野田 牧人 田中 洋 (戦略)	著 訳 監訳・解説	キュレーション	プレジデント社	中央書庫 / 開架	401/R72
中央大学人文科学研究所 唐橋 文 (文) , 渡邉 浩司 (経)	編 執筆	英雄詩とは何か (研究叢書 55)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	902.81/C66
徳重 昌志 (名) , 日高 克平 (商) 一井 昭 (名) ほか	編著 執筆	岐路にたつ日本経済・日本企業 (研究叢書 32)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	332.106/To43
中條 誠一 (経)	著	現代の国際金融を学ぶ : 理論・実務・現実問題	勁草書房	中央書庫 / 開架	338.9/N34
中村 太郎 (理)	著	図解人工筋肉 : ソフトアクチュエータが拓く世界	日刊工業新聞社	中央書庫	492.8/N37
雨宮 真也 , 野村 修也 (法務)	編著	コンプライアンスのための金融取引ルールブック　第 14 版	銀行研修社	中央書庫 / 開架	338.32/A44
林 正樹 (名) 塩見 英治 (経)	編著 執筆	現代企業の社会性 : 理論と実態 (研究叢書 31)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	335.15/H48
檜山 為次郎 (研) , 大嶌 幸一郎 丸岡 啓二 ほか	編著 著	有機合成化学	東京化学同人	理工 / 理開	434/H79
リチャード・A. ポズナー 坂本 真樹 , 神馬 幸一 平野 晋 (総)	著 訳 監訳	法と文学　上・下	木鐸社	中央書庫 / 開架	320.4/P84
廣岡 守穂 (法)	著	政治と自己実現	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	311.21/H71
升田 純 (法務)	著	原発事故の訴訟実務 : 風評損害訴訟の法理	学陽書房	中央書庫 / 開架	543.49/Ma66
ハンス・D. ヤラス 松原 光宏 (法) 工藤 達朗 (法務) 山内 惟介 (法) ほか	著 編 訳	現代ドイツ・ヨーロッパ基本権論 : ヤラス教授日本講演録 (日本比較法研究所翻訳叢書 61)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	323.34/J25
丸山 秀平 (法務)	編	企業の活動に関する法規制 : 日本比較法研究所第 5 回シンポジウム講演録	日本比較法研究所	中央書庫 / 開架	325.2/Ma59
ヘルムート・ハインリッヒス ほか 森 勇 (法務) 工藤 達朗 (法務) 野澤 紀雅 (法務) 廣瀬 克巳 (法) , 畑尻 剛 (法) 土田 伸也 (法務) ほか	著 監訳 編・訳	ユダヤ出自のドイツ法律家 (日本比較法研究所翻訳叢書 62)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	320.28/H51
森茂 岳雄 (文) 矢口 祐人 , 中山 京子	編	真珠湾を語る : 歴史・記憶・教育	東京大学出版会	中央書庫 / 開架	210.75/Y16
山内 惟介 (法)	著	Japanisches Recht im Vergleich (日本比較法研究所研究叢書 83)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	340.5/Y19
山口 真美 (文) , 金沢 創	編著	乳幼児心理学 (放送大学教材 1528882-1-1211)	放送大学教育振興会	中央書庫 / 開架	371.44/Y24
山﨑 久道 (文) ほか	共著	情報サービス論 (現代図書館情報学シリーズ 5)	樹村房	開架	010.8/G34
渡辺 俊彦 (名)	著	政治権力と思想 : 開放の政治、はるかなフーコー (中央大学学術図書 79)	中央大学出版部	中央書庫 / 理開	311/W46

*(法) : 法学部、(経) : 経済学部、(商) : 商学部、(文) : 文学部、(総) : 総合政策学部、(理) : 理工学部、(法務) : 法務研究科、(会計) : 国際会計研究科、(戦略) : 戦略経営研究科、(研) : 研究開発機構教授、(名) : 名誉教授

貴重書・準貴重書の利用について

貴重書、準貴重書の閲覧は館長の許可を要するため、事前の手続が必要です。詳しくは中央図書館２階カウンターにお問い合わせください。
なお、大学院生は指導教員の推薦状が、学部学生は指導教員の同伴が必要となります。

My Cul（マイ・クル）
中央大学図書館広報誌 No.20
（2012 年 11 月発行）

編集発行　中央大学図書館
〒 192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
TEL.042-674-2546

URL:http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/library/